

コラム 協同組合の基本的価値と孔子の“仁”

大谷 正夫（協同総研顧問）

協同組合の基本的価値として、1995年に採択されたICAの協同組合のアイデンティティ宣言では、倫理的価値の一つとして“他人への配慮”(Caring for others)が挙げられている。協同組合の原理原則を再確立しようとするそれまでの論議経過を簡単に歴史的に振り返って見ると、1988年のストックホルム大会でのマルカス会長(当時)の問題提起に始まり、1992年の東京大会での基本的価値に関するベーク報告に引き継がれ、このマンチェスター大会でのマックファーソン提案となったものであり、他人への配慮はその基礎をなしてきたといっても良いだろう。

当然のことながら、他人への絶えざるケアの気持ち、協同する人々の心のコアとならねばならぬことは言うまでもない。

ところでこれらの基本的価値の論議の過程で、日本の協同組合関係者は比較的良く論議をしたと思うのである。マルカス会長をはじめ上記関係者を招いて、膝を交えて議論をし、各自の意見を文書でも提出し、最終文書への反映を意図したのである。

その過程で、マルカス会長が非常にびっくりしたといっている、小生に後から話してくれたことが忘れられない。

それは、日本のある協同組合研究者が、他人への配慮や愛ということについて、中国の孔子が論語の中で“仁”という概念で、早くも紀元前に述べていることを小論の中で紹介したことである。マルカス会長が驚いたのは、孔子の言葉のその内容ではなく、その研究者が世界の文明の根源までさかのぼろうとする試みについてであった。ここで文明

論をやっていると、インド文明や更にはギリシャ・ローマ文明までも触れなくてはならず、現在の協同組合の議論のための焦点がぼけてしまうのでは、という危惧であった。

私も全く驚いたのであったが、その研究者と、つついその点について論議せずに来てしまった。私は以下の点で、心の中でこだわりをもっていた。

一つは、中国での文化大革命中の林彪と孔子に反対する“批林批孔”運動の激しい動きのなかで、孔子の思想は徹底して攻撃され、その中心思想の仁は、奴隷主のイデオロギーとして糾弾されたことを思い出したからである。

小生が北京にいた最初のころは、その真意が良く分からず、その階級分析(孔子は旧奴隷主階級を代表し、新興の封建地主階級に反対した)などに目をみはったものであった。

しかし日にちが経つにつれ、新たな封建地主を基礎に、その中央集権を確立した秦の始皇帝を歴史の進歩と誉めそやし、それが当時の毛沢東であり、没落しつつある旧奴隷主階級を代表し、中央集権に反対し地方割拠を狙うのが孔子、当時の林彪、そして名前は出て来ないが周恩来であるという、全く孔子に名をかりた激しい中央部の政治闘争であることが明らかになったのである。

勿論、その後、文革の終了とともに、傷ついた孔子関係の施設は復旧され、儒教もかなり復興したらしのであるが、曾ての批判をどのように克服したのかについて未知であり、肝心の中国からでなく、日本の側から

孔子の思想を提起することに、ややためらいを感じたからである。

もう一つは、論語の解釈が数多くあり、定まったものがないということと関係して躊躇する気持ちが私にはあったことである。

論語はその弟子たちがまとめた極めて短い文言からなる語録であることから、解釈がいろいろと生ずる原因となっている。

しかも孔子の没後、数百年たってから現在の形の論語が出来上がり、権威ある注釈書もずっと後にまとめられたものである。

論語集解(ロンゴシッカイ、と読む)は3世紀のはじめに何晏によって編集され、12世紀の宋代になって朱熹が、論語集注(ロンゴシッチュウ)なる解釈書を編集した。これらが古注と新注とよばれるもので、解釈の大本となっている。それらの解釈はかなり異なっている。それらと別に何百という解釈書が中国で、そして朱子学の盛んであった江戸時代の日本でも出されている。だから今でも論語を解釈するとき、どの説によったかを明らかにするか、全く自分の独自の解釈である旨をのべないと相手にされないのである。

この状況は、かの有名なシェイクスピアによく似ている。というのはシェイクスピアは一人であったのか複数の人であったのか、についてのイギリスでの論争に似たところがある。偉大なる劇作家とそれを演じたロンドンでの俳優と、生地のストラットフォードのシェイクスピアは3人の別人か同一人物か、の論争もある。

シェイクスピアという姓のスペリングもかなりあり、ジョン・ミッシェルによれば最低57通りはあるという(「シェイクスピアはどこにいる」高橋健次訳、文芸春秋社)。

一番簡単なスペリングでは、シャクスペア(Shaksper)というのまである。しかし最近の

研究では、シェイクスピアとシャクスペアの2つ(それぞれ語尾のスペルの違いで4つ)に絞り込んで検討されているようである。

勿論、我々が通常お目にかかるスペリングは周知のShakespeareである。

仁についても解釈は単純ではない。恐らくその研究者は、顔淵編の「樊遲、仁を問う。子曰く、人を愛す」の問答や、子貢が死ぬまで行すべきことについての問いに「己の欲せざるところを、人に施すことなかれ(衛靈公編)」などを念頭においてマルコス会長に進言したのであろうと思われる。

しかし愛だけを仁の真髄とすると、仁が不明確なものになりかねない。孔子は仁についての弟子たちの問いにたいして、それぞれ皆ちがう答えをしていることは、論語を読めば一目瞭然である。仁の定義をしていないのである。

子罕編の「子罕言利与命与仁」は一般には「子は罕(マレ)に利と命と仁をいう」と読まれているが、論語の中には仁に触れた箇所は非常に多く、この矛盾に中国や日本の学者は悩まされて来ており、いろいろな読み方と解釈が生まれているのである。従って「子罕に利を言う。命と与(トモ)にし仁と与にす」とか「子は、命与(ト)仁与(ヨリ)も利を罕に言う」などなどの読み方もある。最初の読み方でも、回数ではなく、仁の内容について、論語では十分に語ってはいないと解釈する人もいるのである。

さて私は孔子の仁をとやかく言うつもりではなく、それが人を愛するという点では重要な概念であると思っている。儒教の理想である仁については、現在の中国での、そして日本での研究の到達点なども、大いに興味のあるところで参考にしたいと思っている。